パネルディスカッションレポート**#2**
『“地域の力”を生かし、共に気づく山梨の未来〜チーム山梨の実践と、その可能性〜』

「近さ」と「らしさ」を育むデザインを

>リード

2025 年 7 月 13 日、甲州市勝沼のぶどうの丘イベントホールで開催された『山梨デザインカンファレンス 2025 in 甲州』。後半のパネルディスカッションでは、「地域の力を活かし、共に築く山梨の未来〜チーム山梨の実践とその可能性〜」をテーマに、地域を舞台に活動する 3 名が登壇し、山梨の未来像について語り合う場となりました。
ファシリテーターには編集者の小野民氏。ゲストスピーカーとして、98WINEs 代表でワイン醸造家の平山繁之氏、アートディレクターの土屋誠氏（BEEK DESIGN）、建築家の坂野由美子氏（S PLUS ONE 建築設計事務所）が登壇。それぞれが関わるプロジェクト『98WINEs』を起点に、地域資源を活かした空間づくりや共同体としての実践、そして「文化的テロワール」という視点から語られたこのセッションは、これからの山梨のものづくりや関係性の在り方に、多くの示唆を与える場となりました。

>登壇者プロフィール

平山 繁之（ひらやま しげゆき）：98WINEs 代表／ワイン醸造家
神奈川県から山梨へ移住後、長年にわたりワイン造りに携わる。現在は甲州市塩山の里山地域を拠点に、ワインやクラフトビールの醸造、小規模宿泊施設の運営を通じて、循環型の地域づくりに取り組む。

土屋 誠（つちや まこと）：BEEK DESIGN／アートディレクター
デザイン、編集、写真、執筆、出版などを“伝える仕事”を手がける。2013 年に東京から山梨に U ターンし、フリーペーパー『BEEK』を刊行。2025 年には本屋「YOMU」をオープンさせた。98WINEs ではロゴやラベル、商品名など、ブランド全体のビジュアルディレクションを担当。

坂野 由美子（さかの ゆみこ）：S PLUS ONE 建築設計事務所／建築家
山梨県出身。東京での修業を経て 2010 年に帰郷し、設計事務所を設立。「風土や地場産業を建築に活かす」ことを信条に、地域に根差した空間づくりを行う。98WINEs ではワイナリーや宿泊棟、飲食空間などの設計を担当し、土地の魅力を建築として表現している。

小野 民（おの たみ）：編集者／ライター
宮城県出身。出版社勤務を経て、2010 年代から山梨県甲州市へ移住。編集・執筆・企画を通して、地域に暮らす人々や文化に光を当てる活動を行う。地域紙やフリーペーパー、観光冊子、企業パンフレットなど多様な媒体で編集を手がける。今回は初のファシリテーターとして登壇。

>“近くにいる”地域の力

小野　イベント冒頭に「文化的テロワール※」というキーワードが紹介されていましたが、私にとっては 98WINEs こそ、それを感じられる場ではないかと思っています。ではまず皆さんから自己紹介をお願いします。

土屋　『BEEK DESIGN』という屋号でアートディレクターとして活動していますが、実際にはデザイン、編集、写真、文章、企画など、「伝える仕事」をしています。今年の 6 月に今の事務所に移転して、『YOMU』という本屋も始めました。98WINEs のプロジェクトでは、ロゴやラベル、商品名など、視覚に関わるデザインを総合的に担当しています。

平山　98WINEs では、ワインの製造を中心に、ビールの醸造や、小さな宿泊施設の運営も行っています。場所は、甲州市塩山玉宮という地域で、標高 650 メートルほどの、まさに“里山”と呼べる環境です。このプロジェクトを始めるとき、ひとつ強く意識していたのは「自分ひとりでは到底できない」ということ。何か新しい場所を作るなら、「地域に根ざした人たちと一緒にやりたい」という想いから、この「チーム 98」が生まれました。今日はそんな話も共有できればと思っています。

坂野　進学と就職で上京しましたが、2010 年に地元である山梨へ U ターンし、『S PLUS ONE 建築設計事務所』をオープンさせました。戻ってきた当初から、「山梨でしかできない空間をつくりたい」という想いがあり、地場の産業や風土をデザインに取り入れて、地域の磁場を活かした空間づくりを目指しています。98WINEs は、まさにその実践の場として関わらせていただいています。

小野　98WINEs は建築やデザイン、造園や瓦なども含めて、すべて山梨の人たちが関わって生まれた場所ですよね。さて、ここからはその「チーム 98」がどのように生まれていったのか伺っていければと。

平山　ワイナリーを作ろうと思ったとき、まず近所の建築設計をネットで検索したんです。それでヒットしたのがたまたま坂野さんの事務所で（笑）。それまで面識もなかったのですが「せっかくなら、近くの人とやりたい」と思い、まずは坂野さんに声をかけました。

小野　たまたまご近所さんだったんですね（笑）。そこから坂野さんが建築を、土屋さんがデザインをと、少しずつ輪が広がっていったんですね。

坂野　私も平山さんと出会う以前から、「いつかワイナリーを設計してみたい」と密かに思っていたんです。だからお話をいただいたとき、まさに自分が温めてきたテーマだと、迷わずにお受けしました。

※「文化的テロワール（Cultural Terroir）」：自然や風土、歴史、人々の暮らしや営み、それらから発展した産業や文化など、地域の個性や魅力を形づくる多様な要因や成り立ち

>「チーム 98」が生まれたとき

小野　土屋さんはどのようにしてジョインすることになったのですか？

土屋　坂野さんから「平山さんのワイナリーを一緒にデザインしないか」と声をかけられましたね。当時ワイナリーのデザインについては実績がなかったので、正直「自分でいいのかな」という迷いもありました。でも平山さんの経歴や活動を知れば知るほど、その熱量やビジョンの大きさに圧倒されて。

小野　それで「チーム 98」が生まれたんですね。長く続くプロジェクトになると、良いことも大変なこともあったのではないでしょうか？

土屋　そうですね。デザインの仕事って、完成したらひと区切りということが多いのですが、98WINEs では常に「続き」がある感覚があります。定期的に集まってアイデアを出したり、現場で話し合ったり、関わりが途切れないんです。これは山梨という近さもあるかもしれませんけど。

坂野　でもここまで来るまでには、実はかなりぶつかり合いもあったんですよ。お互い「いいものをつくりたい」という思いが強すぎて、プロジェクトが始まってすぐの頃は、何度も本気の議論を重ねましたよね（笑）

土屋　僕も、あんなふうに感情が出るのは珍しいなってぐらい意見をしましたね。でも、それだけ真剣に向き合っていた証拠で。平山はクリエイティブに対するジャッジがとても速いんですよ。判断軸がぶれないし、少しでも違うと思ったらちゃんと「違う」と伝えてくれる。その一方で、大事な判断も信頼して任せてくれるときもあって。

坂野　平山さんってそういった押し引きまでも計算されているのかなと思ったり、なんか上手いんですよね（笑）

土屋　「98WINEs」という名前を僕の方から提案したときも、「それでいきましょう」とスパッと受け止めてくれて。もちろんしっかりと自身の思考があったうえでの決断だと思いますけど、クリエイターへのリスペクトを感じるんですよね。

平山　皆さんを信頼しているからこそですよ。近くにいるからこそ、気軽に声をかけ合えるのは大きいんです。それに、皆さんは単純に「会いたくなる仲間」なんですよ。私にとって、ワイナリーやビール醸造、ホテル運営は“目的”ではなく“手段”なんです。本当の目的は、里山という場所を再び人が集う豊かな場にすること。そのためには、こうしたチームを継続させていくのがベストだと思っているんです。

>個から共へ、そして場へ

小野　平山さんの言う「里山の再生」には、どんな思いがあるのでしょうか？

平山　私の住んでいるような里山は、少し放っておくと人が寄り付かなくなってしまうエリアなんです。でも、かつての里山には、例えば「薪や山菜は必要な分だけ採る」といったような独自のルールがあった。誰のものでもないけれど、共同体の中で生まれた決まりですよね。今はそうした文化が失われ、個人化が進んでいます。私の挑戦は、もう一度“共同体”の感覚を取り戻すこと。都会の人も巻き込みながら、新しい形で「里山を分かち合う仕組み」を作りたいと思っています。ワインやビールは、そのための入口なんですよね。

小野　坂野さんや土屋さんは、この想いを受け止めてどのように感じていますか？

土屋　東京から山梨に戻ったときに、平山さんのような生産者さんがたくさんいることを知って、その哲学に驚かされたんですよね。都会では見えない価値観や、土地と深く向き合う考え方といいますか。だから平山さんの話を聞くと、デザインのあり方にも刺激をもらうんですよね。打ち合わせというより、一緒に山へ入ってその環境を体感させてくれる機会を設けてくれたり、そういったプロセスも僕的にはすごく良かったですね。

坂野　私にとって 98WINEs のプロジェクトは、「地域を変えていくデザイン」の実験場みたいな存在。最初の建物が完成するまで 2 年かかり、その後もビール醸造や宿泊施設など、プロジェクトは続いてきました。結果的に、観光タクシーが週末に必ず立ち寄るような場所になったのは、そうした実験を通した研鑽と、時間の積み重ねがあったからだと思っています。

小野　この地に根ざして活動を続けてきた皆さんにとって、「山梨でのデザイン」についてどういうことを意識していますか？

平山　私は「縛りの中にこそ豊かさがある」と思っているんです。例えば 98WINEs がある場所のような里山では、“らしさ”を守るためのルールや制約がないと維持ができない。そういったルール、いわば“らしさ”を維持し続けていけるような場をデザインすることで、ともに価値観を共有できる仲間が集まってくるようになると思うんです。

土屋　僕にとってデザインは「伝える手段」であって、何かを作るというような意識ではないんです。わざわざ作らなくても、魅力は既に存在しているんですよね。だから自分の役割は、そういった既にある人や場所や営みを丁寧にすくい上げて、“らしさ”や良さを伝えていくこと。きっと自分の一生をかけても味わい尽くせないほど、山梨には面白いものがあるんですよ。

坂野　デザインにコストをかける意義は、目に見えないところにあるんです。98WINEs も、ただワインを造る場ではなく、そこに訪れた人が「ここに来てよかった」と思えるような体験を設計してきました。それが結果的に SNS などを通して発信され、観光地としての

価値も生まれた。だからこそ山梨のような小さな地域でも、丁寧にデザインを加えていく意味はあると実感しています。

>ローカルらしい、関係性のデザイン

小野　最後にこれからの活動や展望について、それぞれ一言ずついただけますか？

土屋　最近本屋を始めたんですけど、自分の地域に本屋があることの価値を感じていて。地域の人が立ち寄ってくれる、ちょっと立ち話ができる、そんな場所を育てていきたいですね。本屋って儲からないんですけど、経済合理性だけでは語れない、でもたしかな“豊かさ”があると思っています。

平山　最近は、自分が育てたブドウの苗木を地元の若い人に託し、栽培・収穫・販売までを地域で循環させる仕組みづくりにも取り組んでいます。目指しているのは、農業や醸造を通した「里山コミュニティ」の再構築ですね。

坂野　設計の仕事を通して実感しているのは、「人で選ばれる」時代が来ているということです。平山さんも、何社か提案を受けた中で「この社長の誠実さがいい」と、施工業者を選びましたよね。それってすごく山梨らしい。人と人の信頼で成り立っていくこうしたプロジェクトが続いていくことに、この地域の可能性を感じます。

小野　山梨は狭い地域だからこそ、関係性の密度が高く、手を抜けない。そうした営みこそが、ローカルでクリエイティブの質を高めていくカギなのかもしれませんね。今日は本当にありがとうございました。